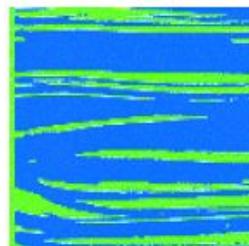


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2021年 秋号 No. 104 (2021年10月31日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 武藤 崇

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内

FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>

E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

行動分析学会第39回年次大会 招聘講演開催記 (櫻井 芳雄)	2
行動分析学会第39回年次大会 学会企画シンポジウム1開催記 (石井 拓)	3
行動分析学会第39回年次大会 学会企画シンポジウム2開催記 (中島 定彦・吉野 智富美・山岸 直基・杉山 尚子)	6
行動分析学会第39回年次大会 公募企画シンポジウム6開催記 (関根 悟)	10
行動分析学会第39回年次大会 若手研究者優秀発表賞受賞コメント (片山 綾)	11
行動分析学会学会賞 (論文賞) 受賞記念コメント (松田 壮一郎)	12
編集後記.....	14

<行動分析学会第 39 回年次大会 招聘講演開催記>

まさか行動分析学会で脳の議論ができるとは

—招待講演を終えて—

櫻井 芳雄
(同志社大学)

行動分析学会第 39 回年次大会で招待講演をさせていただき、ありがとうございました。「シン・ブレインマシンインターフェイス」という魅力的なタイトルを付けてくださいました大会長の武藤崇先生ほか、会員の皆様に心から感謝いたします。土曜の夕方からにも関わらず、多くの方がオンラインで参加してくださり、また事前のご質問も当日のご質問も沢山出してください、さらにいずれも問題の本質を突いた鋭いご質問ばかりで、大いに勉強させてもらいました。例えば、行動の個体差・変動性と脳活動の確率性・非正常性の対応、脳活動の変動性を抑え再現性を高めるためのフィードバック(強化)の効果、運動系と言語・認知系に対するニューロフィードバックの有効性の差異、オペラントとしての神経活動とレスポデント的な神経活動の違い、脳活動の冗長性と個体の生存の関係、脳活動(特に脳波)の機能クラスによる区分、神経細胞の集団的活動と個体の集団的行動の比較、意図による運動と意識的な運動の対比、などなど、まさに行動分析学会ならではの質疑であり、今回参加させていただき、本当に良かったと強く思っております。

正直に打ち明けますと、武藤先生から講演ご依頼のメールをいただいた時、まさか「あの」行動分析学会とは夢にも思わず、応用分野にまたがる新しい学会なんだろうぐらいに思っておりました。なぜなら、私がまだ大学院生だった頃に結成された「行動分析研究会」、そしてそれを引き継ぎ発足した行動分析学会は、記憶の歪みや経年劣化は多々あるかもしれませんが、筋金入りの Skinnerian の集まりだったように思う

からです。行動の予測と制御だけを研究の目的とし、行動の制御変数を同定する実験が全てであり、認知や記憶などの媒介変数もあってのほか、脳の研究なんか全く不要(実際に学会員からそう言われました)という雰囲気でした。もちろん私自身は、当時から行動分析学の有用性と有効性を確信しており、研究の中心的なツールとして使っていたつもりでしたが、わかる者だけがわかればよい時な閉鎖的雰囲気に辟易して、1・2回覗きただけで疎遠になってしまいました。それが今や教育から医療まで多様な分野を巻き込んだ何倍もの規模になっていて、年寄くさいセリフではありますが(じっさいに年寄ですが)、隔世の感を禁じ得ません。このような感覚は、若い会員の皆さんにはもちろんのこと、心理学以外を専門とされている皆さんにもピンと来ないでしょうが、ニューズレター100号に島宗理先生が書いておられる「行動分析学会今昔物語」(大傑作!!)を読んでいただければ、わかっていたかもしれません。

そのようなわけで、今回参加させていただき最も感銘を受けたことは、学会員の皆さんが示して下さった鋭い考察はもちろんですが、発足当時と比べ、行動分析学会および会員の皆さんの意識が大きく変わったことでした。それは、少なくとも私のような部外者から見て、そして昔の行動分析学会の閉鎖性と狭量さ(すみません)をもったいないと思ってきた者から見て、間違いなく良い方向への変化であると、僭越ながら確信しております。今後も行動分析学の方法論と思想を他分野へ拡張しながら、学会がさらに発展されますことを心から願っております。

＜行動分析学会第39回年次大会 学会企画シンポジウム1 開催記＞

新型コロナウイルス感染症対応ワーキンググループの活動とシンポジウムを振り返って

石井 拓

(和歌山県立医科大学)

「もしも私たちが“最強の”行動分析家だったなら、コロナ禍なんてどうということはないかもしれない。」この妄想のような話は、第39回年次大会（2021年8月）の学会企画シンポジウムとして開催された「COVID-19 影響下の行動分析家の実践例に学び将来に備える」の企画者代表としての挨拶でお話ししました。ここでの“最強の”とは、少なくとも、行動分析家として誰のどんな行動でも観測できて、その行動に関係する弁別刺激や強化子を自在に操作できるという意味です。もしもそんなことができたなら、誰もが感染拡大防止に必要な行動をたやすく楽しく実行するような社会を実現できたかもしれません。

この記事では、新型コロナウイルスの感染拡大により変化した社会状況に対応するために日本行動分析学会が設置したワーキンググループ（WG）の活動と、その締めくくりとして開催された上記のシンポジウムについて振り返ります。「行動分析学で世界を救おう」という標語は国際行動分析学会の大会などでときどき目にしますが、“最強”ではない私たちはコロナ禍の中で実際にどのような貢献ができたのでしょうか。

新型コロナウイルス感染症対応ワーキンググループの活動

このWGの活動は2020年7月下旬から始まり、日本では感染拡大の第2波がピークをむかえようとする頃でした。私はなりゆきでWGの委員長を引き受けることになり、理事会からメンバーとして指定された村井佳比子（副

委員長）、奥田健次（オブザーバー）に加えて、青山謙二郎、小野浩一、佐々木銀河、飛田伊都子、野田航、福田実奈（五十音順、敬称略）の各氏にお願いしてメンバーとしての参加していただくことになりました。

WGの活動目的は、新型コロナウイルスの感染拡大に関連して会員や社会にとって役立つ情報を学会ホームページ上で公開することでした。そこで、活動開始当初に次のような情報発信の案をメンバーにお示しました。(1) 感染拡大状況下で会員が提供できる支援に関する情報を発信する、(2) すでに出版されている関連文献などの情報をWGが調べて紹介する、(3) 感染拡大によって変化した社会に対する見解や提言等をWGが独自に作成して公表する。これらの案はあくまでも議論のきっかけとして提示したのですが、コロナ禍の中で行動分析家がどのように活動しているかをまだ十分に把握していなかったこともあり、やや野心的でありすぎたかもしれません。

上記の案を基にしてWGで話し合った結果、実際には次のような情報発信をすることになりました。まず(1)についてはメンバーの案により、感染拡大状況に対応して会員が実践した例を募って紹介する形に変わりました。また、(2)については適切なものを見つけ次第に取り組むことになりましたが、最終的には*Behavior Analysis in Practice* 誌がCOVID-19関連の緊急論文として公開していた記事のいくつかを紹介しました。これらの詳しい内容については、学会ホームページ内の新型コロナウイ

ルス関連ページ (<http://j-aba.jp/library/corona.html>) をご覧ください。

他方、(3) については実現できませんでした。案を示した当時は感染拡大防止のための「行動変容」を行政機関が盛んに呼びかけていましたが、この言葉の使い方が行動分析家の間での使い方とは少し違うように感じられ、あるいは、そもそも行動変容がどのように起こるものであるかの理解を欠いたものであるように感じられましたので、行動分析学という行動変容とはどのようなものかを世の中に理解してもらわなければならないかとも考えました。しかし、それを学会の公式ホームページで公開すると責任が重く、コロナ禍のさなかに真っ先に手をつけるべきかどうかにも自信を持てませんでしたので、この案は見送りました。他に、米国の *Psychonomic Society* が、手による顔への接触、ソーシャルディスタンス、そして手洗いに关するインフォグラフィック・ポスター (<https://featuredcontent.psychonomic.org/behavioral-science-recommendations/>) を公開していましたので、ポスターの情報の背景となっているエビデンスについて解説をつけた上で紹介することも考えました。しかし、国内での感染拡大から半年経過した時点では、ポスターが啓発しようとしている内容はすでに社会にほぼ浸透しているようでしたので、この紹介も見送りました。こうして振り返ってみると、コロナ禍のような危機的状況の中で、必要な情報を適切なタイミングで、しかも責任をもって世間に示すのはそれほど簡単ではありませんでした。

学会企画シンポジウム

幸いなことに、新型コロナウイルス関連ページで紹介する実践例について情報提供を呼びかけたところ 5 人の会員から紹介記事を寄稿していただくことができましたので、それらの実践例紹介を基にして年次大会でのシンポジウムを企画できました。話題提供の演題は次の通りです (括弧内は話題提供者で、実践例紹介記事の

寄稿順、敬称略)。

- オンライン研修会での個人情報の保護を目的とした規定の策定 (門脇陽一)
- オンライン授業スキルの効率的な獲得を狙いとした研修プログラム開発 (三田地真実)
- 行動的チェックリストを用いた美容技術の遠隔指導 (秋田留美)
- 児童発達支援事業所におけるウェブ会議システムを使った小グループ活動 (竹島浩司)
- オンライン「おうち楽しみプロジェクト」 (平澤紀子)

これらの実践例はいずれも、感染拡大防止のために人が集まったり対面でやりとりしたりするのを避けなくてはならなくなった状況で、それまで行ってきた研修、教育、支援などをできるだけ継続するために情報通信技術を活用したり、そのために必要な倫理規定や技術習得体制を整備して成果を上げたものです。当日のシンポジウムでは、今回のオンライン年次大会の方針に従って討論の時間をできるだけ長くとったこともあり、それぞれの話題提供に対して参加者から多くの質問やコメントをいただくことができました。そのため、感染拡大状況下で行われた実践の成功例を広く会員に伝えるというシンポジウムの役割はある程度果たせたと考えています。また、参加者からのコメントの中で、オンラインツールを活用した応用行動分析的支援が今後継続または拡充されていくとしたら、支援者側の行動も強化される仕組みをどのように作るかや、支援を受ける側がインターネット／ゲーム依存に陥るのを予防する措置をどのように用意するかといった、今後の課題が論点として得られたこともシンポジウムの成果だったと言えます。

ワーキンググループの活動全体を振り返って

WGは、コロナ禍のさなかにあっても工夫して教育や支援を継続しようとする行動分析家の活動を会員に紹介することで、感染拡大状況下で学会として有用な情報を発信するという役割をある程度果たしました（話題提供者の実践例の他に、シンポジウム参加者からの実践例紹介として、特定非営利活動法人 ADDS が開始したオンライン発達相談サービス kikotto についても熊仁美さんから紹介していただきました）。また、わずかではありましたが、コロナ禍中の支援活動に関する海外での議論についても紹介できました。WGのメンバーのそれぞれが自分の職場等でもコロナ禍への対応に追われていた中での活動としては、それなりの成果であったと言えるかもしれません。

他方、コロナ禍に苦しむ社会に対して学会として大きな貢献ができたかという点、そこまでは力が及ばなかったのも正直なところですが、これは本学会のWGだけでなく、インターネット上の情報などから窺い知る限りではおそらく国際行動分析学会のような海外の学会でも同様であったと思われます。もちろん行動分析学は感染症への対応を専門とする学問ではありませんので仕方ないとも言えるのですが、「行動分析学で世界を救おう」とはいうものの、実際には「小さなことから、コツコツと」を実践していた状況でした。

そうってしまった反省を将来に生かすには、まずコロナ禍で生じた問題を一般化して捉えるべきかもしれません。会員諸賢にとっては今さ

らの指摘でしょうが、コロナ禍で生じた大きな問題の1つは、行動分析学の観点からみると、人々が対面して活動することを前提として機能していた弁別刺激や強化子を含む随伴性が、危機的状況で必要な生活とは両立しにくかったことだと思われます。実際、外出等の制限のある生活の中で減ってしまった強化子をどのように増やすかという問題は、平澤先生が話題提供で強調されました。（なお、もう1つの問題は新しい生活様式に必要な行動の習得でした。）

そして、こうして一般化してみると、程度の差こそあれこの問題はコロナ禍以前から存在し、今後も形を変えて現れるだろうということに気づきます。例えば、対面できる機会が少ない相手に行動分析的な支援をどのように届けるかという問題は以前から存在し、解決策も検討されてきました。また、何らかの事情で社会的に孤立した状況で生活する人や家族はこれまでもいましたし、これからもいるでしょうが、そのような状況で健康な生活を維持するにはどうすべきかも同型の問題です。今後、新型コロナウイルス感染症の蔓延は収まるところに収まるとは思われますが、対面を前提とした随伴性が制限される場面への対処は課題として残ります。将来、社会にまた危機的状況が生じたときに行動分析学が重要な貢献をするためには、こうした一般性をもつ問題に重点的に取り組むべきかもしれません。

〈行動分析学会第 39 回年次大会 学会企画シンポジウム 2 開催記〉

行動分析学は日本の大学でどのように教えられているか

—第39回年次大会 学会企画シンポジウム2を終えて—

中島 定彦
(関西学院大学)

第 39 回年次大会 (オンライン開催) の学会企画シンポジウム 2 「行動分析学は日本の大学でどのように教えられているか」は、大会の全イベント中で最多の 179 名の参加者を得て、8 月 28 日(土) 13 : 00 ~ 14 : 30 に行われました。

話題提供者は発表順に、吉野智富美先生、山岸直基先生、島宗理先生、杉山尚子先生の 4 名でした。このうち、大会直後に個人ブログに記事を書かれた島宗先生を除く 3 名の先生に、ニュースレターにご寄稿いただきました (次のページから)。なお、島宗先生のブログ記事は <http://www.hosei-shinri.jp/simamune/2021/08/j-aba-2021-1.html> から読むことができます。

「行動分析学を大学で教える」と一口に行っても、大学の種類や対象とする学生、科目の種類と目的、他科目との関係や位置づけ、各種の制約などによって、教育内容も方法も異なっています。そこで、4 名の先生方にはどのように授業を進めているか事例報告をしていただき、工夫や考え方を紹介いただきました。

前日に、もう 1 つの学会企画シンポジウム「Covid-19 影響下の行動分析家の実践例に学び将来に備える」がありましたので、テーマの重複を避けるため、このシンポジウムは"コロナ禍での授業"ということは強調せずに企画を進めました。しかし、コロナ禍がこの企画を生み出す 1 つの契機となったことは間違いありません。私自身、オンライン授業という新しい随伴性の中で、これまでの授業の方法や内容を見直す機会にしたいという思いがありました。

ところで、行動分析学に関する 1 コマ漫画で

おそらく最もよく知られているのは、米国コロンビア大学の学内ユーマー雑誌 *Jester of Columbia* に 1950 年に掲載されたもので、実験者はラットを訓練しているつもりだが、実はラットが実験者を訓練しているのだ、と揶揄したものです (Google の画像検索で「psychology rats Jester Columbia」と入力するとすぐに見つかります)。一見「茶化した」ようなこの漫画ですが、これは行動分析学の神髄を表しています。この漫画は、行動分析学の最初の教科書を著した Keller and Schoenfeld (1950) がコロンビア大学で担当していた「心理学入門」を受講した学生 2 名が描いたものだそうです。彼らは授業の一環としてラットのレバー押し実習に参加していたのだらうと考えられています (Lattal, 2020)。

実験者がラットのレバー押し反応を餌粒で強化するように、ラットは実験者が餌粒を与える行動をレバー押しという学習成果で強化します。教師と学生の関係もこれと同じです。教師は学生の勉強行動を強化し、学生は教師の優れた教授行動を強化するのです。

ウィズコロナ/ポストコロナの時代に、教師—学生間の相互随伴性はどうなるのでしょうか。話題提供者以外の会員の方々の授業上の工夫もお聞きしたいものです。ご意見をニュースレターにぜひお寄せください。

引用文献

- Keller, F. S., & Schoenfeld, W. N. (1950). *Principles of psychology: A systematic text in the science of behavior*. Appleton.
- Lattal, K. A. (2020). Wit, wisdom, and *Principles of Psychology*. *Mexican Journal of Behavior Analysis*, 46, 276–281.

〈行動分析学会第39回年次大会 学会企画シンポジウム2開催記〉

話題提供の機会を得て

吉野 智富美

(ABAサービス&コンサルティング)

中島先生から話題提供者のお話を頂いた当初は私には荷が重いと感じ、お引き受けするか悩みました。今では、お引き受けしてよかったです感じています。その理由をまとめます。

今回の経験で、私は5年間の講義を振り返ることができました。この間は、教職課程の学生に、“使える学問”として行動分析学をどう講義していくか悩みの日々でした。特に、①講義における学生のターゲット行動には何があり、それらにどう介入したらいいのか、②講義という名の介入をどう評価するか、この2点で苦勞してきました。私の本業である療育と比較すると、講義という枠組みでは、学生のターゲット行動が具体的には何で、それらを増減させるためにどのような方法をとればよいかが見えにくかったのです。

今回、他の3名の先生方から、行動分析学を行動分析的に講義するという視点でたくさんの知恵をいただきました。そして、結局のところ、具体的にどうすればよいかは、教員自身が工夫するしかないのだ、ということもわかりました。

ただ、そうだととしても、島宗先生がブログで触れられているように、失敗談、成功談、いろいろな体験を先生方とシェアできる機会があれば、ありがたいと思いました。他の先生方がど

うかは存じ上げませんが、私は孤独です（非常勤講師として）。上記のような機会があればと願います。

最後に。山岸先生からは、学生が講義時に遂行している行動そのものをターゲットにして行動分析学を教えていこうとするフリーオペラントな方法を学びました。あえて、ワークという環境を設定せずとも、教育に使える機会を設けることができそうです。

島宗先生からは、学生に選択させる機会を与えることを学びました。学生と教員間での合意（目標）が形成され、集団の講義でも個人ベースでの教育を促せるような気がしました。

杉山先生からは、人脈が学びの機会となること、そして、どのような介入にも目的があり、最終的には自分で遂行できるようにフェイドアウトしていくメタレベルの視点を持つことが、結果的にさらなる学習につながることを学びました。

このような機会をくださった中島先生に感謝を申し上げます。

〈行動分析学会第39回年次大会 学会企画シンポジウム2開催記〉

私がこれから目指す「講義」について

山岸 直基
(流通経済大学)

今回、学会企画シンポジウム「行動分析学は日本の大学でどのように教えられているか」に参加して、発表の機会を与えられたことに感謝するとともに、他の先生方の発表を聞いて自分自身の講義を振り返るよい機会となったことに感謝しています。これから私自身が「行動分析学」の講義において何を目指すべきかがぼんやり見えてきた気がします。これまでは多くの学生に「行動分析学は面白そう」と感じてもらうことを主な目的にしていました。「行動分析学」という刺激の機能を変化させることに重点を置いていたともいえるかもしれませんが。これは学生にとっての講義の機能が、その科目について学ぶことだけでなく、卒論ゼミ選択のための情報収集でもあるためでした。

しかし、これからは「行動分析学を学ぶことは面白そう」と感じてもらうこと、すなわち、行動分析学に関する知識を身につけ、知識を活用すること自体が強化的になるようにシフトしていくヒントが得られたような気がしています。他の先生方が強調されていたのは、受講生全員のアクティビティ、クイズなどの課題を授業に組み込むことでした。私の所属する大学でも最近 online の講義が増え、それに伴って web 上で

学生に回答してもらった小テストのストックも増えました。この小テストを活用し、対面授業に組み込むことで、学生のアクティビティを増やし、web の課題を授業前にやり終えることが強化的になる仕組みをつくることができるかもしれません。もちろん受講生のレベルや講義の位置づけによって、与えられた課題を行うかどうかの影響されます。その一方で、シェイピングによって、徐々に web 課題を導入することで、学生が自然に宿題として課題をやってくるようになるような仕組みを考える余地はありそうです。

私の発表を聞いていただいた方の中には、学生が私の授業を嫌悪的だと感じるようにならないか心配された方もいらしたかもしれません。現状では、受講学生数や卒論ゼミへの応募者数から推測するとその点について心配はないと考えています。これからの私の講義では、「行動分析学」だけでなく「学ぶこと」も面白そうと思ってもらうこと、その両立が課題となりそうです。

<行動分析学会第39回年次大会 学会企画シンポジウム2開催記>

行動分析学は行動分析的に教えます

杉山 尚子

(星槎大学共生科学部/星槎大学大学院教育学研究科)

私が初めて行動分析学を教えたのは1990年、慶應義塾大学文学部人間科学専攻に設置された「人間科学特論(実験的行動分析)」であった。当時はまだ産業図書の『行動分析学入門』はなく、教科書は使わずに約26回(4単位)の講義をし、中間試験と期末試験に加え、夏季休暇には行動の測定、冬季休暇には行動変容の実験を行いレポートを書く、今でいう“じぶん実験”を課していた。

1994年に『行動分析学入門』の私家版を作ってから事前学習を課せる環境となり、前週に配布する「学習ガイド」に解答しながら教科書を1章分読み、授業は討論中心の演習形式。毎回小テストを実施し、成績は中間&期末試験と小テストの得点、討論における発言で評定する。その結果、履修者は150名から25名に激減した。この頃、この科目の履習学生だった林裕介さん(ペンシルベニア州立大准教授)には、「勉強量を考えてこの一科目でA評価3つ分に値する」と言われたものである。

1990年以来、志は「Whatever the course is called,

you teach only what you know (Keller, 1982, p.10)」であったが、1994年以降は、それに加え、どの大学で教えようとも「学びオペラントの自発とその強化をいかに増やすか」が加わった訳である。

2013年からは通信制大学に勤務するようになり、学習時間の87%を占める自学自習においていかに学びオペラントの自発を強化できるかが課題となっている。秋田(2021)に見るように、学びの随伴性を行動分析的に設計しておけば、技術実習であろうと大きな設計変更せずにオンラインに移行することができる。学習環境が混沌とする現在、行動分析的な教育はますます重要性を帯びているのである。

引用文献

秋田留美(2021). 行動的チェックリストを用いた美容技術の遠隔指導. 日本行動分析学会第39回年次大会論文集, p.21.

Keller, F. S. (1982). *Pedagogue's progress*. TPI Publications.

※なお、同じく「学会企画シンポジウム2 行動分析学は日本の大学でどのように教えられているか」にご登壇の島宗理先生(法政大学)は、先生のブログにて本シンポジウムに関する記事を書かれています。併せてご覧ください。

<http://www.hosei-shinri.jp/simamune/2021/08/j-aba2021-1.html>

<行動分析学会第 39 回年次大会 公募企画シンポジウム 6 開催記>

シンポジウム「行動リハビリテーションの最先端」に 参加して

関根 悟

(東京大学生産技術研究所)

2021 年 8 月の日本行動分析学会で「行動リハビリテーションの最先端」というタイトルのシンポジウムを山本淳一先生、鈴木誠先生、辻愛里先生、大森圭貢先生、佐々木正太郎先生、私の 6 名で行いました。いま、私たちのグループはムーンショット型研究開発事業で共同研究を進めています。山本先生が立ち上げた行動リハビリテーションの枠組みで、ADL 支援の介入方法を心理学、理学療法、作業療法、情報工学が連携して開発しています。本シンポジウムではこれら 4 つの領域からそれぞれの先生方が、行動リハビリテーションの現状について紹介してくださいました。

辻愛里先生(東京農工大学)は、発達障害児のコミュニケーションの指標として、他者との距離感を、定量的に示す手法についての提案をしていただきました。辻先生と私は以前から共同研究をしており、自閉症児の行動データの解析をしていただいていた。これまで、辻先生の作成したプログラムを基に、発達障害児支援を行っており、今回のプロジェクトでも辻先生の協力でデータを収集しています。

大森圭貢先生(湘南医療大学)には立ち座り動作に対して支援をする重要性、支援効果を示すために重心動揺計およびモーションキャプチャを用いた計測手法について紹介していただきました。大森先生とも以前一緒に自閉症児の臨床ケースを持っており、そこで運動学習の手技を見せていただいていた。

鈴木誠先生(東京家政大学)、佐々木祥太郎先生(聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院)は今

回のプロジェクトで初めてお会いした方々でした。鈴木先生にはリハビリテーションでよく用いられる、身体ガイダンス中の神経振動同期について紹介していただきました。佐々木祥太郎先生は、脳卒中患者の着衣動作の流暢性から他の日常生活動作の流暢性へ般化することを予測した回帰モデルを紹介していただきました。どちらの先生も、定量的なアセスメントから、支援へとつながっている発表をしてくださいました。

いずれの先生も、支援のために定量的なアセスメントをし、新たな介入を作り出そうという意義のある研究を紹介していただいています。今回のプロジェクトを通して、ヒトの運動、そして運動学習の法則が新たに明らかになっていくことを強く期待しています。いまそれぞれの領域の専門家とともに実験を協働して進めており、毎日新たな発見がある刺激的な日々を送っています。次回の行動分析学会でまた、皆さんに進捗を発表しフィードバックをいただける日を心待ちにしております。

<行動分析学会第39回年次大会 若手研究者優秀発表賞受賞コメント>

若手研究者優秀発表賞を受賞して

片山 綾
(大阪市立大学)

この度は若手研究者優秀発表賞をいただき、大変光栄です。ありがとうございます。

私は修士の頃からセルフ・コントロール研究を行っています。選択行動の分野において「セルフ・コントロール」というと、遅延大強化子と即時小強化子の間での選択場面が主に用いられてきました。しかし、この選択場面を用いた研究では、成人を対象とした場合、ほとんどの人がセルフ・コントロールを示すという結果が得られています。では、成人は皆、ダイエットのために目の前のケーキを我慢し、次の日のためにアルコールをほどほどにし、締め切り前の自分のためにコツコツ論文を書き続けることができるのでしょうか？ これを読んでくださっている方々の中でも、NO と答える方が大半だと（勝手に）思っております。かくいう私自身も、以前甲子園球場へ行った際に「今日は胃の調子が悪いから何も食べない」と友人に宣言した30分後には両手に唐揚げを抱えて帰ってきて、友人から呆れられたことがあります。（案の定、帰りの電車の中で気分が悪くなり、大変後悔しました。）

「私以外にも、衝動性を示す成人は一定数いるはずだ！」という切実な思いから、これまで、新しいセルフ・コントロール選択場面（SI/Lg-Sg/LIパラダイム）を提案してきました。これは、従来の選択場面に「損失」の随伴性を組み込むことで、日常場面における成人のセルフ・コントロール選択をより正確にモデル化できるようにしたものです。具体的には、従来の研究では「遅延大強化子」選択肢と「即時小強化子」選択肢の間で選択させていたところを、「即時小損失－遅延大利得」選択肢と「即時小利得－

遅延大損失」選択肢の間で選択させています。この選択場面を用いた結果、従来の研究とは異なり、成人でも衝動性を示す人が一定数見られるようになりました。

今回の大会では、これまで実験室でしか行ってこなかったこの新しい選択場面を新たにweb上で行った結果について発表させていただきました。対面での実験がなかなか難しい状況の中手探りでプログラムを組んでweb実験を行ったのですが、結果としては、対面の場合でもweb上で行った場合でもデータにほとんど差は見られないことがわかりました。

当日は、オンラインではありませんでしたが、多くの方と意見交換が出来て大変ありがたかったです。また、大会全体を通し、参加者同士の交流がとても重視されていて、充実した3日間を過ごすことができました。若手研究者優秀発表賞のエントリーも、以前と比べるとかなり気楽にできるようになっており、今後益々盛り上がっていくのではないかと期待しています。

最後になりましたが、発表を聞きに来てくださった方々、このような機会を用意して下さった若手会と年次大会準備委員会の皆様、そして、衝動性がすこぶる高い私に、いつも決して弱化子を使わず、定期的に強化しながら指導して下さる佐伯大輔先生に、この場を借りて深く感謝申し上げます。



<行動分析学会学会賞（論文賞）受賞記念コメント>

酔いどれ研究者の徒然なる受賞記念雑文

松田 壮一郎
(筑波大学)

この度は、行動分析学会論文賞を授賞頂き、幸せに満ち溢れています、筑波大学の松田です。初めて行動分析学会に参加したのは、2010年に神戸親和女子大学で開催された、第28回年次大会でした。それから10年以上、あらゆる学会の中で唯一、毎年参加している学会で論文を評価して頂いたことは、私にとって望外の喜びです。授賞記念講演の後、石井拓先生から、『数十個、ツッコミどころがある』と言って頂いたことも私にとって望外の喜びです（今度、時間が無くて聞けなかったポイントを聞かせてください！）。記念講演で既に、色々話をさせて頂いたので、こちらでは酔いにまかせて、徒然なるままに雑文を書かせて頂きたいと思います。

いやあ、しかし、10年以上継続参加していると、たくさんの友人・知人ができて嬉しいですね。皆さんと早く、対面で酒を酌み交わしながら尽きない議論（そして途中からは私にとって記憶の無い会話）をしたくてたまらない、今日この頃です。研究の継続において、学会で受ける社会的強化は絶大なことを、日々痛感しております。みなさん、いつも強化して頂きありがとうございます。

今回授賞頂いた論文、「遊び場面における広汎性発達障害幼児のポジティブな社会的行動に対するユーモアを含んだ介入パッケージの効果」は、博士課程院生だった当時、『とにかく、目の前の子どもを思いっきり笑わせる研究がしたい！！』という衝動に突き動かされて始めた研究です。もちろん、早期発達支援において重要なのは「標的行動の学習」です。しかし、子どもに対するセラピストの強化価を高め、支援する場所へ子どもが来ることや、課題へ従事す

ること自体を強化する上で、「子どもを笑わす」ことも非常に重要だと私は考えています。

同時に、子どもの学習、すなわち行動変容こそ、支援者の「支援する」行動の第一の強化子となることは重要です。しかし、子どもからの社会的な強化、すなわち「子どもからの注目や笑顔」というのは、保護者や支援者にとって、とても強力な強化子として機能していると思うのです。だって、子どもの笑顔、可愛くないですか？私はとっても好きなんです、笑ってる子どもを見るのが。

子どもだけではなく、支援者や保護者の「支援する」行動も、多様な強化子によって維持された方が、持続可能な支援体制を構築できると思うのです。それが、他者からの評価であっても、お金であっても、周囲からの称賛であっても、倫理的な問題さえ無ければ、何だって良いと思うのです。もちろん、子どもの行動変容のみを強化子とするよう、自身をルールによって制御している「職人」も大好きですし、自分もそうありたい、と常に考えています。ただそれを、全ての支援者に求めるのは難しい。間口を広げ、多くの人に参入してもらうことにより、早期発達支援に関わる人口が増え、結果として多様なニーズに対応でき、持続可能な社会システムを樹立することへ、繋がるのではないのでしょうか。

まあ、大仰な話を書きましたが、結局は、私自身が楽しくなりたい、というだけの話なのかもしれません。随伴性のまにまに。私は、私“だけ”楽しい状態は楽しめなくて、子どもも、保護者も、支援者も、その他あらゆる人々が、「今より、ちょっとでも楽しい」となっている瞬間

に立ち会える状態が、とっても嬉しいのです。『今より、ちょっとでも楽しい』という状態を、科学的にどのように記述できるか、という問題については、今後の私の研究動向を見守って頂ければ幸いです。

散文駄文、大変恐縮ですが、最後に今回の受賞に関連して、最も印象に残っている私の記憶を共有させてください。本研究の共著者であり、当時の指導教員でもある山本淳一先生から、ふ

とした瞬間に、『松田のあの研究、好きなんだよな』とお言葉を頂いたことがあります。その言葉は、今でもそっと、心の宝箱に入れてあります。恩師の発言を強化するには、常に新しい研究知見を提供しなければいけない（新しくも面白い研究ネタを仕込まなければ、話をして/聞いて、もらえない）ので、今後とも、日々精進したいと思います。何にせよ、今日も飲み過ぎました、随伴性のまにまに。

編集後記

今号は、2021年度年次大会の開催記特集です。2020年から続くコロナウイルスの影響に対して、行動分析家たちがどのように取り組んできたのかが分かる発表も多くありました。当日も心が熱くなりましたが、先生方の開催記を読んで改めてそう思いました。大会自体も、こ

の時勢に伴って発展した最先端のオンライン技術＝バーチャル空間を利用したオンライン集会となりました。すごい時代になってきましたね。

(O.A)

J-ABA ニュース編集部よりお願い

- ニュースレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャグやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニュースレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。
- ニュースレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで開催します。
- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。また、学術的に明らかに誤った記述、学会活動や行動分析学に全く関係のない記事、営利目的と考えられる記事(著訳書等の紹介を除く)、差別的表現や誹謗中傷が含まれる記事等については、編集部より修正を求める場合や掲載をお断りする場合があります。

〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中 4-2-2

畿央大学 教育学部 大久保研究室内

日本行動分析学会ニュースレター編集部 大久保 賢一

E-mail: kenichi.ohkubo@gmail.com